

Learning Patterns

ラーニング・パターン

創造的な学びのパターン・ランゲージ



CreativeShift

変化が激しい現代社会では、あらゆる年代・立場の人にとって「学び」が重要になっています。そしてそこで求められている「学び」は、単なる詰め込み型ではなく、新しい関係性を発見し、自ら意味を編集・構成していくような「創造的な学び」（クリエイティブ・ラーニング）です。

ところが、現状では、そのような「創造的な学び」をうまくできている人もいれば、できていない人も見受けられます。この違いは、一体どこから来るのでしょうか？

それはどうやら、「創造的な学び」を実践するためのちょっとしたコツを知っているかどうかによるようです。うまくできている人は、自分の経験のなかでそのコツをつかんだ人であり、できていない人は、まだそのコツに気づいていない人なのです。そうであるならば、その学びのコツを共有することによって、より多くの人が自らの学びの質を変えることができるはずです。

このような問題意識から、「創造的な学び」を実践するコツを「ラーニング・パターン」というかたちにまとめたのが、本冊子『Learning Patterns』です。本冊子には、「創造的な学び」を実践するための40のコツを収録しています。ここには、これまであまり語られることのなかった学びの秘訣が詰まっています。本冊子を読むことで、「創造的な学び」のコツをつかみ、自らの学びのデザインに活かしてみてください。

井庭 崇

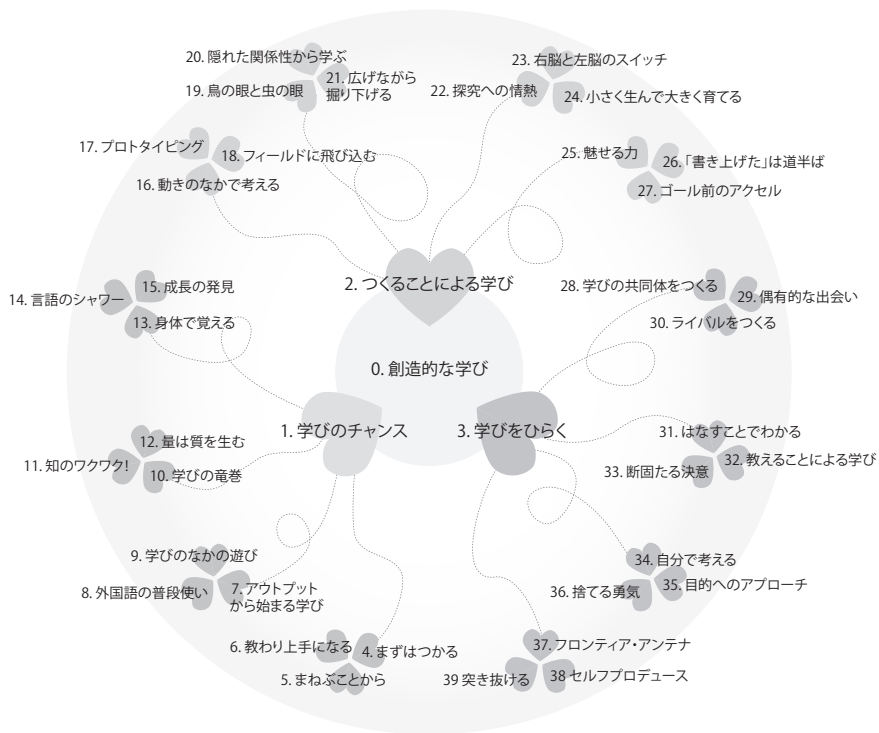
ラーニング・パターンの全体像

ラーニング・パターンは、「創造的な学び」のコツを記述したものです。ここで「創造的な学び」(Creative Learning)と呼んでいるのは、何かを生み出し、つくりながら学ぶということ、また、その学びの方法さえも自分自身でデザインしながらつくっていくということです。

学びは、既存の知識を習得することが目的ではなく、それによって何か現実の問題を変えていくための活動です。複雑な問題が絡み合った時代においては、問題を解決していく力をもつこと、そのための学び方を知っていることがとても大切なことになってきます。そのような創造的な学びは、どのように実現できるのでしょうか。

本冊子には、創造的な学びの経験則をまとめたラーニング・パターンが全部で40個収録されています。すべてのパターンが目指す中心として、《創造的な学び》(No.0)があり、それに続いて、《学びのチャンス》(No.1)、《つくることによる学び》(No.2)、《学びをひらく》(No.3)という3つの原則によって体系づけられています。

その後のパターンは、大きく分けて3つのまとまりに分かれています。第一のまとまりは《学びのチャンス》をつくることに関するパターン (No.4 ~ 15)、第二のまとまりは《つくることによる学び》を実践するためのパターン (No.16 ~ 27)、第三のまとまりは、他者とともに学び、発展させていく《学びをひらく》ためのパターン (No.28 ~ 39) で、これらのパターンが相互に関係し合うことで「創造的な学び」の実現を支えます。

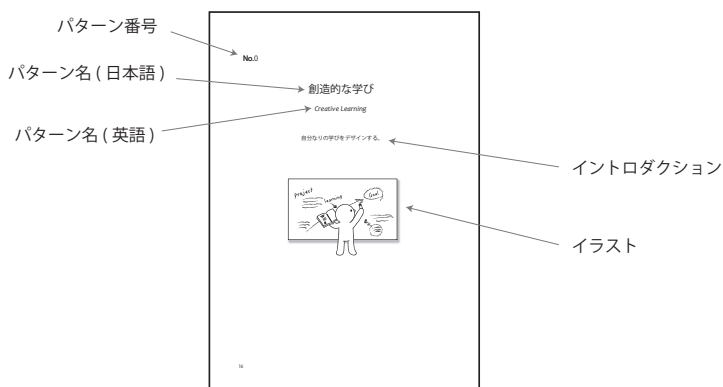


ラーニング・パターンの全体像

個々のパターンの読み方

個々のパターンは、ある一定の形式で記述されています。

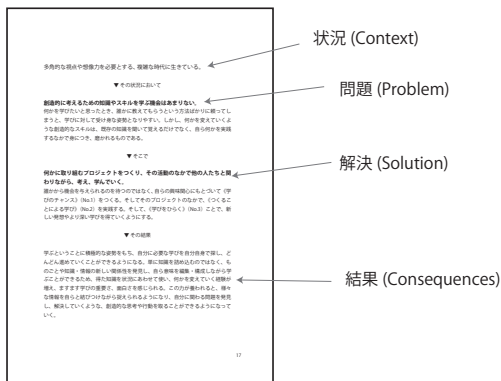
各パターンの左ページには、そのパターンの内容をつかむための概要が書かれています。上から順にみていくと、「パターン番号」、「パターン名（日本語）」、「パターン名（英語）」、「イントロダクション」、「イラスト」となります。



まずページの左上に書いてあるのが、各パターンにつけられた「パターン番号」(Pattern Number) です。それに続くのが、日本語と英語の「パターン名」(Pattern Name) です。パターン名は、パターンの内容を適切に表し、かつ魅力的で覚えやすいようにつけられています。

その次に来る「イントロダクション」(Introduction) と「イラスト」(Illustration) は、そのパターンの内容をいきいきとイメージできるようにするためのものです。

各パターンの右ページには、そのパターンの詳細、つまり学びの秘訣の詳細が書かれています。上から順にみていくと、「状況」、「問題」、「解決」、「結果」となります。



まず最初に、そのパターンをどのようなときに使うのかという「状況」(Context)が書かれています。区切りを示す「▼ その状況において」の後、その状況において生じやすい「問題」(Problem)が、太字で書かれています。その下には、問題が発生してしまう理由や、問題の具体的な例など、「問題」を捉えるための情報が記載されています。

そして、区切りを示す「▼ そこで」の後、その問題を「解決」(Solution)する考え方が、太字で書かれています。「解決」は抽象的で、個人に合わせて考える余地を残してまとめられているため、それを具体的な行動に落とすとどうなるかという例がその下に書かれています。

再び区切りを示す「▼ その結果」が来た後、このパターンを適用したときに予想される「結果」(Consequences)が書かれています。

ラーニング・パターンの活かし方

ラーニング・パターンは、次のように活用できます。

(1) 学びのコツを知る —— 前から順に読んでいく。

このラーニング・パターンには、多種多様な学びのコツが書いてあるので、前から順に読んでいくことで、読み物のように楽しむことができます。左ページの概要を中心に読み進め、気になったものがあれば、右ページの詳細な情報を読んでみましょう。読み終わったときには、学びのコツの全体像がつかめているでしょう。

(2) いまの自分に必要なコツを探す —— 状況から当てはまるものを見つける。

ラーニング・パターンでは、どんなときに問題が起こりやすく、そのコツを使うとよいのかという情報が「状況」として右ページの上に明記されています。そのため、いまの自分に当てはまる状況を見つけることで、必要なパターンを探し出すことができます。なお、状況が当てはまるのであれば、そこに書かれている「問題」は、今は起こっていないなくても、今後起こってくる可能性があるかもしれませんので、参考にしてみてください。

(3) 学びのコツについて話す —— 共通言語として使う。

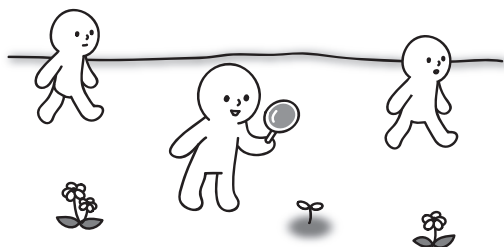
ラーニング・パターンは、学びのコツについての共通言語を提供します。そのため、自分のなかでコツを活かすというだけでなく、パターン名を友達との会話のなかで使ったり、先生との学習相談のなかで使ったりすることができます。学びのコツは、本来、言葉にするのが難しい経験則なのですが、パターン名を使うことで端的に話せるようになるはずです。

No.1

学びのチャンス

Opportunity for Learning

学びの機会は、自らつくりだすものだ。



学び始めようとしている。

▼その状況において

自分にぴったりと合った学びのプログラムや機会は、あまり見つからない。
知識やスキルなどを身につけるための機会を、誰かから与えられることはあるだろう。しかし、与えられた学びの機会が、必ずしも自分に合っているとは限らない。多くの人に合わせてあることで、自分のニーズとはずれてしまったり、レベルが合わなかったりすることがある。そういうなかで学んでいるだけでは、次第に学びへの意欲が削がれていってしまうことがある。

▼そこで

自分の興味・関心を軸として、どうすれば学びたいことを学べるかを考え、その機会をつくり出す。

まずは、自分の興味・関心に照らし合わせて、面白いと感じることや、やりたいことの実現のために必要だと思う知識やスキルを把握する。その上で、そのテーマに関連する情報を集め、コミュニティや勉強会・研究会があれば積極的に参加する。また、何かをつくったり実践したりする機会を設けることで、必要な知識・スキルを具体的に把握し、さらなる学びの方向性をつかんでいくとよい。

▼その結果

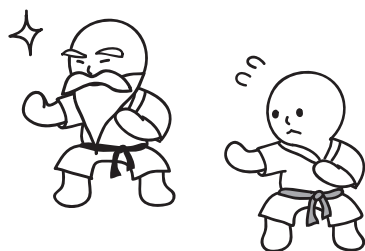
自分の興味・関心につながるものを学ぶことができ、意欲をもって学び進めることができる。また、その活動の中で、次なる関心ややってみたいことを見つけやすくなり、自分の興味を広げながらも、深めていくことにつながっていく。《知のワクワク！》(No.11)を味わいながら、《学びの竜巻》(No.10)をつくり、主体的に世界を広げ続けることを楽しむことで《探究への情熱》(No.22)を高め、自分にあった学びを続ける原動力となっていく。

No.5

まねぶことから

Copycat Learner

学ぶことは、真似ることから。



新しい分野で学び始めたり、身につけたいスキルがある。

▼その状況において

最初から「自分らしさ」を出そうとすると、学びのスタートがうまく切れない。

何かを学び、成果を出していこうとするときには、自分らしさを表現して、他の人との違いをつくっていきたいと思うものである。しかし学び始めで、標準的な成果を出すことすら難しい段階では、自分らしさを表現しようと考えても、それが他者に伝わるレベルには到達しにくい。またその分野で活かせる自分らしさや特長を、すでに自分が持っているとは限らないので、空回りしてしまいがちになる。

▼そこで

まずは手本となる人の真似から始め、基本的なことを学び取ってから、自分のオリジナリティについて考える。

自分が見習いたいと感じる先生や先輩・プロを見つけ、その人の発想や活動の仕方をよく観察する。そうするなかで、自分が真似をしたいと思うスタイルや、やり方などを見つけ、その「型」を自分のなかに取り込み実践する。「型」を身につけ、十分にできるようになったら、その後に初めて、それにアレンジを加えて自分のオリジナリティを出していくようにする。

▼その結果

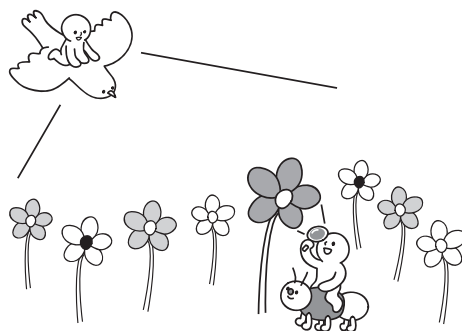
すでに成果を出している人のやり方（型）を習得することで、その道での基本的な成果をつくり出せる領域に短い時間で到達できる。そして、基礎ができるようになった上で、自分らしさを加えていくことで、基本がしっかりとしていながら、オリジナリティを他者に認めてもらえるような成果を出していくことができるようになる。そのアレンジのしかたを《自分で考える》(No.34) ことで、成果の中で自分らしさを強めていくことができ、次第に自分にしかできないことができるようになっていく。

No.19

鳥の眼と虫の眼

A Bug's-Eye & Bird's-Eye View

その二つの視点を行き来する。



物事をより深く理解したり、表現したりしたい。

▼ その状況において

全体を見ているだけでは細部はわからず、部分に注目するだけでは全体を見失う。

同じものを見ている、どういった視点をもつかによって見えてくるものは異なるものである。したがって、細部を観察したり細かい部分をつくり込んだりしているときには、全体が見えにくいし、逆に、俯瞰的な観点で物事を見ているときには、詳細を見落としてしまいがちになる。かといって、俯瞰的な視点と詳細な視点の両方を同時にもちことも難しい。

▼ そこで

全体を俯瞰する視点と、細部をきめ細かく見る視点とを切り替えながら、物事を考えていく。

ある視点での作業に一区切りがついたら、次は細部から俯瞰、または俯瞰から細部へ視点を切り替えて見つめ直すことを意識的に行う。たとえば、論文執筆において、本文内の表現を突き詰めているときには、論文全体のなかでの位置づけを確認するようにして、今つくり込んでいる表現が適切かを見直してみる。逆に、論文の全体像を考えているときには、ときどき、個々の章で何を書くのかの具体的なイメージを膨らませる時間をもつようにする。

▼ その結果

全体的な位置づけやバランスもよく、細部の詰めもしっかりした考えに至ることができる。また、自分の活動に対して鳥の眼と虫の眼をもつことは、《広げながら掘り下げる》(No.21) ためにも、《セルフプロデュース》(No.38) のためにも重要となる。さらに、論理と感覚の思考モードを《右脳と左脳のスイッチ》(No.23) で切り替えることと併せて行くと、様々な視点からの深みをつくることができる。